

令和6年度第2回「青少年部会」 摘録

- 1 日 時 令和6年10月17日（木）午後2時～午後4時
- 2 場 所 井門明治安田生命ビル6階 子ども若者はぐくみ局会議室
- 3 出席者 大束委員、戌亥委員、井本委員、國重委員、竹久委員、長者委員、前田委員（8名）
- 4 欠席者 北川委員、辻本委員（2名）
- 5 議 題
 - （1）京都市はぐくみプランの進捗状況等について
 - （2）次期京都市はぐくみプランの素案について
- 6 配布資料
 - 資料1 青少年部会 委員名簿
 - 資料2 京都市はぐくみプランの進捗状況等一覧表（令和5年度実績）
 - 資料3 次期京都市はぐくみプラン素案
- 7 参考資料
 - ・ 京都市はぐくみ推進審議会条例・施行規則・運営要綱

事務局	<p>京都市はぐくみ推進審議会令和6年度第2回「青少年部会」を開催する。</p> <p>本日の会議については、市民に議論の内容を広くお知りいただくため、京都市市民参加推進条例第7条第1項の規定に基づき公開することとしている。あらかじめ御了承いただきたい。</p> <p>それでは開会に当たり、大東部会長から御挨拶を頂戴する。</p>
大東部会長	<p>(大東部会長 御挨拶)</p> <p>今回の審議をいただき、次期はぐくみプランの策定に向けては、現在最終段階になっている。この青少年部会において、前回、活発に御議論いただいたところであるが、今回も引き続き和やかな雰囲気、議論、御意見をいただきたい。</p>
事務局	<p>「京都市はぐくみ推進審議会条例施行規則」第4条第3項において、当部会は、委員の過半数が出席しなければ、会議を開くことができないこととされているが、本日は、委員9名中7名の方に御出席いただいているため、当部会が成立していることを御報告申し上げます。</p> <p>ここからの議事進行については、大東部会長に願います。</p>
大東部会長	<p>本日の議題は、(1)京都市はぐくみプランの進捗状況等について、(2)次期京都市はぐくみプランの素案についての2つである。次期はぐくみプランについては、現行のはぐくみプランでの取組状況を踏まえたうえで検討されているため、事務局からは2つの資料をまとめて説明いただく。委員の皆様にはそれらを踏まえたうえで意見交換をお願いする。</p>
事務局	<p>(1) (2)について、以下の資料を用いて説明。</p> <p>資料2 京都市はぐくみプランの進捗状況等一覧表 (令和5年度実績)</p> <p>資料3 次期京都市はぐくみプラン素案</p>
大東部会長	<p>ただ今の事務局からの説明について御質問や御意見などを頂戴したい。</p>
大東部会長	<p>コラム③はどの辺りに掲載される形になるか。</p>
事務局	<p>資料3 8ページのイメージ図を掲載、と記載のある箇所に掲載予定である。</p>
大東部会長	<p>このコラムのみの掲載ではなく、居場所や出番を支えているような図</p>

	<p>を掲載できないか。第1回の議論では、地域資源同士の連携が周りにあることが伝わるようなイメージ図を作成いただきたいと話していた。例えば、コラムが真ん中にあり、その周りにイラストを配置することで、周囲がサポートをしているというイメージができるのではないかと。</p>
竹久委員	<p>文字で書くよりは、図で見たほうがイメージとして捉えやすい。コラムだけを見て「居場所」と「出番」とは何かを捉えることは難しい。</p> <p>また、コラムには「つなぐ」ことを「出番」と捉えると記載されている。「出番」に「つなぐ」ならわかるが、「つなぐ」イコール「出番」ではないのではないかと。こちらにも具体例が図示されていると分かりやすいのではないかと。</p>
長者委員	<p>京都市の施策がある中で、それぞれの民間の取組もある。それらが繋がっていかないと、子どもの支援も出番も切れてしまう。文字だけでは、どこにでも手を差し伸べている場所があるということを経都市民がぱっと見た時に受け取れないのではと思う。</p>
事務局	<p>現在の案では伝わりにくいということについて検討したい。</p> <p>興味や関心、自身の挑戦をする場を作る、設ける、またそういう機会を提供することが「出番」であると考えている。最終版に向けてどういった図示がよいかを検討させていただく。</p>
大東部会長	<p>「出番」とは何なのかというところももう少し検討いただきたい。</p>
事務局	<p>一例を挙げて、「出番」とはこういうものであると示したほうが分かりやすいと思う。そこも参考にして検討していく。</p>
竹久委員	<p>資料3の説明の中で機会提供の話があったが、「出番（機会）」と「出番づくり（機会提供）」は別物なので、言葉から受け取り方がずれないように表記いただきたい。</p>
大東部会長	<p>8ページ目以外の部分で御意見があるか。</p>
大東部会長	<p>確認だが、24ページ（5）イ【主な取組】の一覧に「市政への参加」が加わるということか。また、具体的には、資料2に記載の、No. 1712、No. 1713 が関わってくるということか。</p>
事務局	<p>お見込みのとおりである。</p>
長者委員	<p>コロナ禍を経て、若者の中で、意識や環境・価値観等、様々な変化が</p>

	<p>あったと思う。それらの変化はどこかに反映されているのか。</p>
大東部会長	<p>別紙3 3 ページの5 に現状について簡潔に記載があり、ここに関わってくるものと思うが、例えば状況4の中に、コロナ禍を経てどのように変化したか等記載される予定であるのか。</p>
事務局	<p>昨年度実施したアンケート調査の結果を用いて、もう少し詳細に記載する予定であるが、前回と今回のアンケートでは質問内容も異なり、経年比較が困難であるため、アンケート調査からコロナ禍を経た変化を読み取ることが難しい。</p>
大東部会長	<p>前回調査を行った5年前がちょうどコロナ禍前であることから、昨年度のアンケートで具体的にコロナによる影響や変化についての質問をしていなくても、5年前の結果と比較をして、コロナ禍によるこういった変化があったという解釈はできるのではないか。</p>
事務局	<p>比較できる項目がないか、精査させていただく。</p>
大東部会長	<p>コロナ禍を経て、子どもや若者にどのような変化があったか、あるいは変わっていないか御意見はあるか。</p> <p>大学生を見ていると、オンライン授業が増えたり、飲み会がなくなったことにより、直接顔を合わせてコミュニケーションをとる機会が減り、人間関係が希薄化していると感じる。</p>
長者委員	<p>一昨年、卒業する大学生の文章の添削をする機会があったが、友人とやり取りができず、外出もできず、いかに大学生活が困難なものであったかと綴ってあるものが多かった。</p> <p>小中高生にしても、コロナが落ち着いた今でも、希望をすればオンライン授業を選択でき、学校に行かなくても良い仕組みができています。自分のリズムで生活をできる選択肢ができたことが進路にも影響し、全日制では不可能な、多様な対応のできる通信制などの学校へ進学する子どもが増えている。</p>
戌亥委員	<p>子どもの関心が薄いという問題は、コロナ禍がきっかけで表面化した部分はあったが、それより以前から存在していたものだと思う。</p> <p>例えば選挙1つをとっても、選挙権のない子どもは投票所に連れて行かず家で留守番をさせられたり、排除されてきたことが多かったのではないかと。そうすると、いざ投票をできる年齢になっても、それまで選挙に触れてこなかったことにより選挙に関心・興味がなく、何をすれば良いか分からなくなる。子どもの関心が薄いのは、子どもが社会参加で</p>

大東部会長	<p>きる機会を与えられなかったことが原因ではないかと思う。</p> <p>大人と子どもを分断するのではなく、大人が活動をしている場に子どもも参加ができる、連れていけるような環境を作り、幼いうちから様々なことに関わることでできる機会を創出することが大切である。それが居場所や出番にも関わってくるのではないか。</p> <p>資料2 No. 1708 においても、地域とのつながり、と抽象的に記載がされているが、大人と子どもがどう関わっていくか、大人が出番づくりのために何ができるのかという所を書き込めると良いのではないかと思う。</p>
戌亥委員	<p>ボランティアにおいても、子どもはここまでしかできない、子どもだからこれはできない、と線を引かずに、大人がしている活動に子どもも参加させることが重要である。</p>
前田委員	<p>子どもがゲームをしたり、漫画を読んでいたりと、大人はどちらかというといいイメージを持たないが、子ども自身が好きなことが地域や活動の場において生かされることによって、それが出番となる。</p> <p>自己肯定感というものは、ただ面談をして話ただけで生まれるものではない。自分で何か体験をして、喜びを感じたり褒められたりすることによって生まれるものであると思う。社会福祉協議会では、子どもが好きなことを体験できるような場作りを、地域のみなさんや大学生等にも協力していただき行っている。</p>
竹久委員	<p>青少年活動センターにおいても、したいこと、関心のあることから始めるということを大事にしている。一方で、最初から選挙に参加したいと思う子どもは少ないのではないかと思う。しかし、幼少期に親の選挙について行っていた子どもは、将来、そうでない子どもに比べて投票行動をしているといった調査結果もある。子どもは興味がないだろうと決めつけて、機会を奪ってしまわないよう、大人が気を付けることが必要である。</p> <p>また、子ども・若者自身が関心のあることだけで考えると、子ども・若者の経験の枠内でしか広げられない。子ども・若者が興味がないように思われることでも、機会があれば関心を持つこともある。</p> <p>資料2 No. 1709 に記載のあるボランティア数は、コロナ禍であってもあまり数の変動がなかった。むしろ、コロナによって活動が制限されている中で、何かできることはないかと青少年活動センターに来る若者もいた。そういった面では、コロナ禍によって活動的になった人と、そういった場から離れていって機会を失った人とで二極化が進んだようにも感じている。</p>

	<p>また、コロナによる大きな変化は、オンライン化が加速したことであると思う。その一方で、オンラインに消極的な人もいるため、どちらの人にも対応するために、幅広い対応が必要となった。オンラインも意識しつつ、対面も大切にするといった広い視野を、計画にも反映できれば良いと思う。</p>
大東部会長	<p>青少年活動センターで何かオンラインの取組はあるか。</p>
竹久委員	<p>若者に向けてしているものはあまりないが、支援者向けの研修やボランティアの会議等、オンライン化したものは一定ある。深夜にオンライン会議があり大変であるとの話を大学生から聞くこともある。</p>
大東部会長	<p>通信制学校のオンラインの授業では、誰もビデオもマイクもオンにせず、淡々と授業が進んでいくことがあると聞く。対面で授業を受けることが難しい子にとっては、そういった形式の方が参加をしやすくなっている。このような、コミュニケーションツールとしてオンラインを希望する人がいる中で、どのように活用していくかが重要である。</p>
井本委員	<p>1年ほど前から、授業を対面に戻す動きが出ている。しかし、オンラインで問題が生じていない中で、対面にする必要がないと言う人も少なくはない。私は対面の方が良いと思っているが、周囲の反応を見ると、どちらか選べるのであれば、オンラインを希望する人のほうが多いのではないかと感じる。</p> <p>大学にもボランティアサークルがあり、大学生が主体となって地域に関わるボランティア活動も行っていると思う。そういったところで大人と若者が関わるきっかけになると思う。ボランティア活動は就職活動にも繋がるので関心がある人は多いのではないと思う。</p>
大東部会長	<p>社会福祉協議会には、就職活動のためにボランティアをしに来る人もいと聞いたことがある。</p>
竹久委員	<p>ボランティアを始めるきっかけは人それぞれであり、友達についてきたという人もいる。就活においては、最近はボランティアよりもインターンシップや実習の方が重視されているように感じるが、青少年活動センターでは、希望があればボランティア証明書を交付している。しかし、証明書を受け取った後でも継続してボランティアに参加をしてくれている学生も少なくはない。携わっていく中で理由付けがされることもあるので、きっかけはあまり重要なものではないと思う。</p>
大東部会長	<p>大学入学における自己推薦制度では、選考書類にボランティア証明書</p>

	<p>を添付して志願してくる高校生が増えている。学校は教育機会の一環として、生徒にボランティアをさせることが多い中で、学校と関係機関が繋がれると良いと思う。大人同士の繋がりも重要であり、そのキーワードとなるのが学校であると思う。</p>
<p>國重委員</p>	<p>プランは京都市の現状を踏まえて、この先どうしていくかということが記載されているかと思うが、全体としてとてもポジティブな内容であると感じる。それが悪い事ではないが、青年期や思春期においては、自分はいったい何者なのか、自分は何が好きなのかと葛藤をする時期であり、そういった思いを抱えている若者に寄り添うことが重要であると思う。</p> <p>居場所というものは、自分の好きなことをできると同時に、何もなくてもそれが認められる場所である。プランにも「寄り添う」や「何もしないことが認められる場所」という視点を取り入れていただきたい。</p>
<p>前田委員</p>	<p>声を出せない若者の声が、どのようにプランに反映されるのか気になる場所である。現状のプラン案だと、支援からこぼれ落ちてしまう若者もいるのではないか。新しくヤングケアラーについては記載されているが、現プランにはある、不登校やひきこもりについての記載がなくなっているのはなぜか。</p>
<p>事務局</p>	<p>不登校については21ページのイに記載をしている。ひきこもりについては、資料3には記載がないが、23ページのイ【主な取組】に關係してプラン別冊に盛り込んでおり、ホームページに掲載する予定である。しかし、プランに全く記載がないというのはいかがかという指摘だと思うので、内容について検討させていただく。</p>
<p>前田委員</p>	<p>ひきこもりの原因は健康上の問題だけではなく、就労や不登校など様々な要因により起こっているものであるので、23ページのイの「保健・医療の提供」という項目に記載されるのは少し違和感がある。</p>
<p>大東部会長</p>	<p>24ページの(5)アの記載内容では、理想的なライフデザインを描けるように支援をしていく、と読み取れる。「多様なライフデザイン形成への支援」と題するのであれば、絵にかいたようなライフデザインでなくても、それぞれが持つライフデザインを実現できるように寄り添っていく、といった表現もあればよいと思う。</p>
<p>竹久委員</p>	<p>22ページの(4)アでも、「児童の健やかな成長を支え、豊かな感性を育むことができる居場所を提供」とあり、居場所で何か成長をしなければならぬように感じる。「自分のペースで過ごせる」といった記</p>

	<p>載にすることで、居場所に良いイメージを持てるのではないか。また、表現を揃えて、「児童」ではなく「子ども・若者」としていただきたい。</p> <p>ライフデザインについて、青少年活動センター等においては、大学を卒業して正社員になる、といういわゆる一般的な就労が当たり前ではないという観点でキャリア支援を行っている中で、既にライフデザインは多様化していると実感している。結婚・子育てをしないという選択肢も増えてきている中で、多様性に合わせた関わり方をしていくという方向性を持っていただきたい。</p>
大東部会長	<p>24 ページアについて、あえて「仕事・結婚・子育て」と記載せず、「自らの希望するライフデザイン」だけでも良いのではないか。</p> <p>また、コロナ禍に不登校やひきこもりが増加してから、コロナが収まった現在でもその数は減っていないという現状がある。そうした若者にどう対応していくかを、課題としてプランに盛り込めるのではないか。</p> <p>先ほども発言のあった、寄り添うという面では、若者たちが一方的に支援を受けるのではなく、若者同士が協力し合うことも「寄り添う」ことに含まれると考える。「寄り添う」や「支えあう」という表現が、24 ページ（5）アにあればよいと思う。全ての若者が、プランを「自分たちに向けたものである」と感じられるのが理想である。</p>
事務局	<p>行政が作成するプランということもあり、全体として前向きな面はあると思う。こぼれ落ちてしまう人にも目を向けているということが伝わるように意識させていただく。</p>
國重委員	<p>児童館も居場所でありたいという思いを持って運営をしているが、実際に子どもたちにとって居場所となっているかは分からない。居場所とは何たるかは、人それぞれ異なるものであると思う。</p>
戌亥委員	<p>その人にとって、その場で貢献ができ、安全・安全な場所であるということが、居場所の1つの条件であると思う。何か成果を上げたり、役に立つことだけでなく、そこに存在をしているだけでも、親をはじめ周囲の人にとっては貢献をしていることになる。</p>
大東部会長	<p>居場所とは何かということを文章で表すのは難しいと思う、そういった面でも、8 ページのイメージ図があればと考えているのだが、イメージ図はどなたが作成されるのか。</p>
事務局	<p>居場所を定義することは難しく、また、その場を居場所と感ずるかは子ども・若者自身であるため、居場所はこうだと記載して定義するよう</p>

	<p>な形にするのもどうかと考えている。</p> <p>イメージ図は事務局で作成をするものであるので、皆様にも御意見をいただきたい。複数の関係機関が繋がっているということをどう表現するかが難しい。</p>
竹久委員	<p>そこが居場所かどうかは子ども・若者が決めることであると前提にしているのであれば、それに合わせて「居場所を提供します」ではなく、「居場所をともにつくっていきます」といった表記がよい。青少年活動センターでも居場所をテーマに活動しており、居心地よく過ごせる場になってほしいと考えているが、居場所を提供するとは言わないようにしている。</p>
井本委員	<p>私も、自分の好きな場所やよく行く場所はあるが、ではどこが居場所かと言われてもすぐに答えることができない。しかし、特定の場所でなくても、複数あることで繋がりもその分多いと感じる。居場所を探すために訪れるのではなく、何度か訪れるうちに自然と居場所だと感じられるようになると思う。</p>
竹久委員	<p>居場所を目的としていなくても、結果として居場所になっていることは多い。そうなるための場を、若者とともにつくってきたい。</p>
國重委員	<p>児童館などは居場所であることを目的として作られたものであるのに対して、コンビニや自室など、結果として居場所になっているものがある。支援者としては、自分たちの施設等が居場所になれば良いと思ってはいるが、それを決めるのは子ども・若者であるというところに難しさがある。</p>
大東部会長	<p>8ページに掲載予定のコラム③に、子ども・若者の声として、自分たちより上の年代の人と関わりたいという記載がある。大人が居場所をどう支え、どう関与しているかが重要だと思うので、それをイメージ図で表現していただきたい。</p>
前田委員	<p>24ページ(5)ア【主な取組】に「きょうと婚活応援センター」と記載があることに違和感がある。ライフデザインの形成のために、あたかも「きょうと婚活応援センター」が必要であるかのように感じてしまう。</p>
大東部会長	<p>現行のプランでは「きょうと婚活応援センター」という記載はないように思うが、どういった経緯でこれが追加されたのか。記載があることによって、ライフデザインとして結婚をすることが当たり前であるかの</p>

事務局	<p>ように感じられる。</p> <p>また、【主な取組】の中でいくつか施設が挙げられている中で、「きょうと婚活応援センター」のみに鍵かっこがあるため、強調されているように感じる。</p> <p>ライフデザインを結婚ありきなものと考えているわけではなく、プランはこども大綱を勘案しながら作成しており、結婚を望む方への支援の1つとして記載をしている。多様なライフデザインがあることは理解しているが、結婚をしたい人もいる中で、京都市としても婚活事業を取り組んでいることから記載をしているということで御理解いただきたい。</p> <p>鍵かっこは名称に対して付けているものであり、強調するという意図はない。</p>
竹久委員	<p>「きょうと婚活応援センター」をはじめとする関係各所との連携や要請、とあるが、「きょうと婚活応援センター」以外の関係各所とは何を想定しているのか。それらも加えられると良いのではないか。</p>
事務局	<p>「きょうと婚活応援センター」以外の取組として挙げている地域若者サポートステーションや京都市若者就職支援センターも関係各所である。</p>
大東部会長	<p>京都府との連携という面では、京都ジョブパークも記載しても良いのではないか。【主な取組】の上3つの取組についてももう少し整理いただきたい。</p>
竹久委員	<p>資料2 No. 1712の主な成果として「青少年が参画している本市附属機関等の割合」とあるが、今後は、参画している青少年自身がどれだけ参画できているか、意見が反映されていると感じるかというところに発展をさせていく必要があると感じる。</p>
大東部会長	<p>それでは、予定の時間となったので閉会とする。</p> <p>事務局へ進行をお返すする。</p>
事務局	<p>以上をもって、第2回「青少年部会」を終了する。</p>